

鈴木遺跡出土の資料について

金盛典夫・松田 功

099-41 北海道斜里郡斜里町本町 斜里町立知床博物館

はじめに

本稿で紹介する遺物は全て斜里町字峰浜で酪農業を営む鈴木勲氏の採集によるものである。氏は昭和49年、共同放牧地として造成された雑木林跡で多量の土器・石器を発見し、その後同地を訪れる都度採集に努めた結果、遺物総量は3,481点に達した。

同遺跡はブルドーザーによって表土が剝離され、火山灰が露出していたため層位的には不明瞭な部分も多く、平面的にも移動していると思われるが、若干の続縄文式土器を除くほかは、斜里町では発見例の少ない縄文早期に属するものであり、また、石器の大半は縦長の剝離による硬質頁岩製のものであることから、縄文早期の石器組成を考えるうえで極めて重要な資料であると考えられるので紹介することにした。しかし、報告するにあたって紙数の都合上、全てを紹介することが出来ないため、定形的なもののみを抽出して図と写真で示したにすぎない。他の資料も含めて現在は斜里町立知床博物館に所蔵保管してあるので、必要があれば公開することで了解をいただきたい。

なお、遺跡は斜里町字峰浜134-1番地に所在するが、発見者である鈴木勲氏にちなんで「鈴木遺跡」としたものである。

遺跡の立地

鈴木遺跡は斜里市街から東へ13kmの知床半島の基部にある。

斜里から峰浜に至る海岸線には沖積世の(おそらく縄文海進によるものであろう)砂丘が発達し、シュマトカリベツを境いに東側へ20m級の段丘が伸びている。

遺跡はこの段丘よりも一段高い尾根上の段丘面にあり、標高は約140mである(図1)。前面にはシュマトカリベツの支流であるボンシュマトカリベツ¹⁾が流れ、背後にヌカマツ川がある。このシュマトカリベツは必ずしも大きな川ではなく、

遺跡付近ではむしろ細流といっても良いくらいであるが、この下流方向には非常に多くの遺跡が点在している。²⁾ また、上流方向には断層変位地形である平坦部が広がり、現在は畑地及び草地になっているが、その一部には湿地帯もあったようである。したがって二つの川に挟まれた狭い尾根上の遺跡のように見えるが、上下の平坦面の間位置する遺跡でもある。

なお、遺跡周辺には洪積世末の堆積といわれる朱円層(杉本他1962)が広く分布する。この朱円

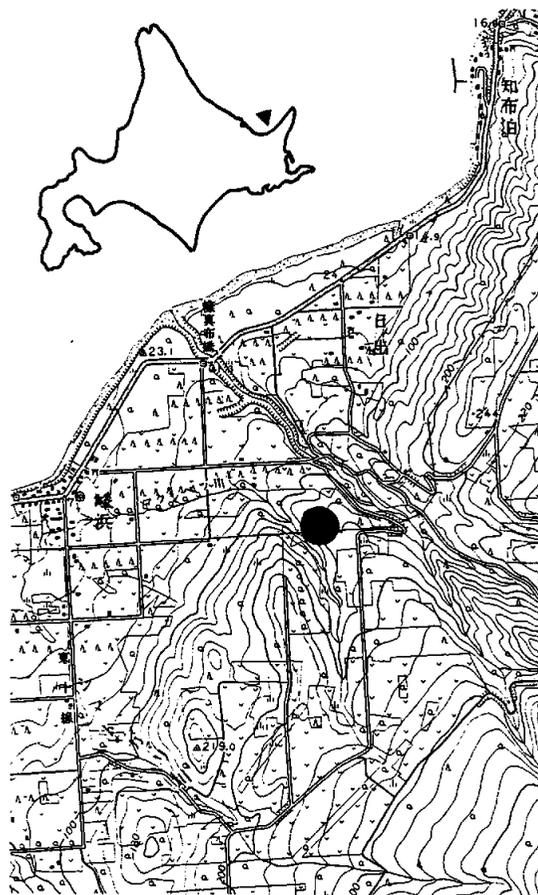


図1 鈴木遺跡(●印)の位置

(国土地理院1/25000地形図「峰浜」の一部を縮小)

層は火山灰・軽石・砂・粘土から成るが、下位には硬質頁岩の層があり、一部ヌカマップ川流域で露出面が認められる。したがって、本遺跡出土の

石器素材の大半を占める硬質頁岩は、比較的容易に求めることができたはずである。



写真1 鈴木遺跡全景

出土遺物

土器

いずれも小破片であるが、形状及び文様から2群に分類した。

I群は胎土に繊維を含む無文の土器である。採集された土器のほとんどがこれであり、縄文早期に位置づけられるものである。

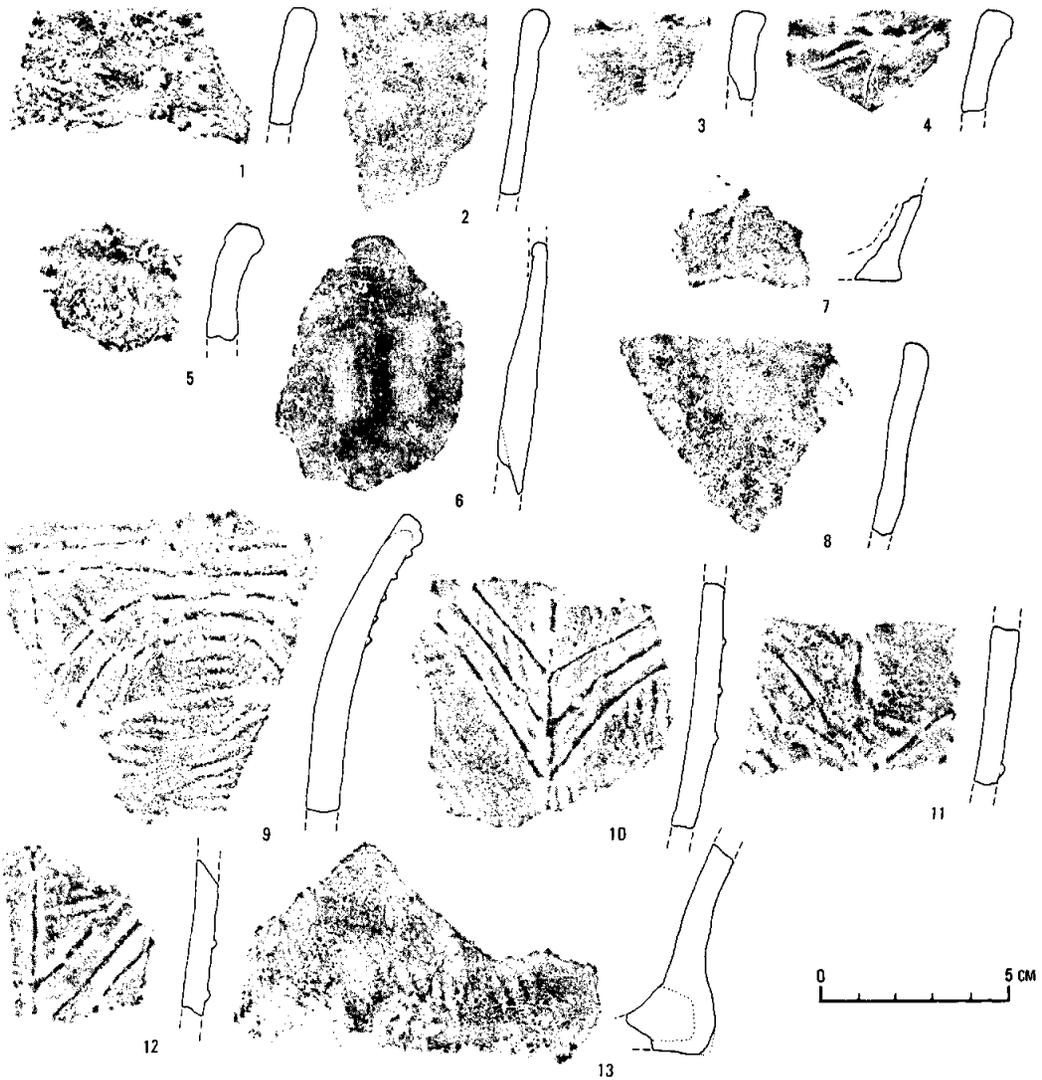
II群は粘土紐の貼りつけによる微隆起線文と口縁に小突起をもつ、いわゆる後北C式土器である。I群と比較して出土量は極めて少ない。

以下、各土器の特徴について説明する。

I群土器 (図2-1~8) 1~5は口縁部破片である。赤褐色及び黄褐色を呈し、量的な差は若干認められるが8を除いていずれも胎土に繊維を含んでいる。厚さは約8mm程度である。細片であるため断定はできないが、図示したもの以外を含めて観察した結果、すべて平縁である。口唇部はやや丸味をおび、指でなでられているものは外側にいくぶんふくらんでいる。3の口縁部には指による整形痕と思われる横方向の擦痕が認められる。また、4には縄らしい圧痕があるが、縄によるものか他の工具による条痕か判別できるほど明瞭ではない。6は胴部破片である。器面は表裏とも整

形時の指による凹凸が著しい。断面には輪積痕が明瞭に認められる。7はわずかに角を張り出す平底の底部破片である。8は1~5と同じように無文の口縁部破片であるが、胎土には繊維を含まず、細石粒、特に石英の混入が著しい。この点で他のI群土器と違いがあるが、器面整形などの特徴も一致するため同一の群とした。

II群土器 (図2-9~13) 9はやや外反する口縁部破片である。器壁は約10mmの厚さがあり、口唇部は丸味をおびて山形の突起を有する。突起の頂部には口唇に直交する細い刻みが1本ある。口縁上部には2本の横走る断面三角形の微隆起線があり、縦の線を貼付した後弧状線が3本加えられている。RLの縄による回転縄文は微隆起線文が付される前のものである。また、器面は白色の薄い膜に覆われており、胎土に多量の細石粒が含まれているにもかかわらず器面に露出していないのは、器面が半乾燥の状態のとき、微隆起線を貼付するために再び表面に水を加えてなでつけた結果であろうと考えられる。10~12は胴部破片である。いずれも同じ文様構成であり、器壁の厚さも5mm前後であるため、同一個体である可能性が高い。整形、施文法とも9に類似する。13は底部



(→写真2)

図2

破片である。内側の整形は粗く、横方向になでられているが細石粒の露出が認められる。底部は平底で、断面に接合面が出ている。

石器

石器および剥片の大多数は硬質頁石によるものであり、図10-1~12に示した縦長の剥片およびナイフ・スクレイパーの類に黒曜石製のものがみられる程度である。このような中で石鏃だけは42点中2点だけが頁岩製で、他はすべて黒曜石製である。

加工痕のない縦長剥片 (図3-1~21) いずれ

も頁岩製である。剥離方向は全て主剥面と一致する。破損しているものも少なくない。打面は例外なく縦に調整打が加えられているため、最終剥離の段階で剥片に残る打面は1mm以下のものも少なくない。特に小型のものでは小さい。刃部の整形は認められないが、出土量の多さから判断して、このまま使用していたものと考えられる。

使用痕および加工痕のある縦長剥片 (図4-1~17、5-1~9) 全て頁岩製である。刃部に調整を加えないまま使用し、そのことによって刃こぼれの生じたものと、これに再調整打を加えたも

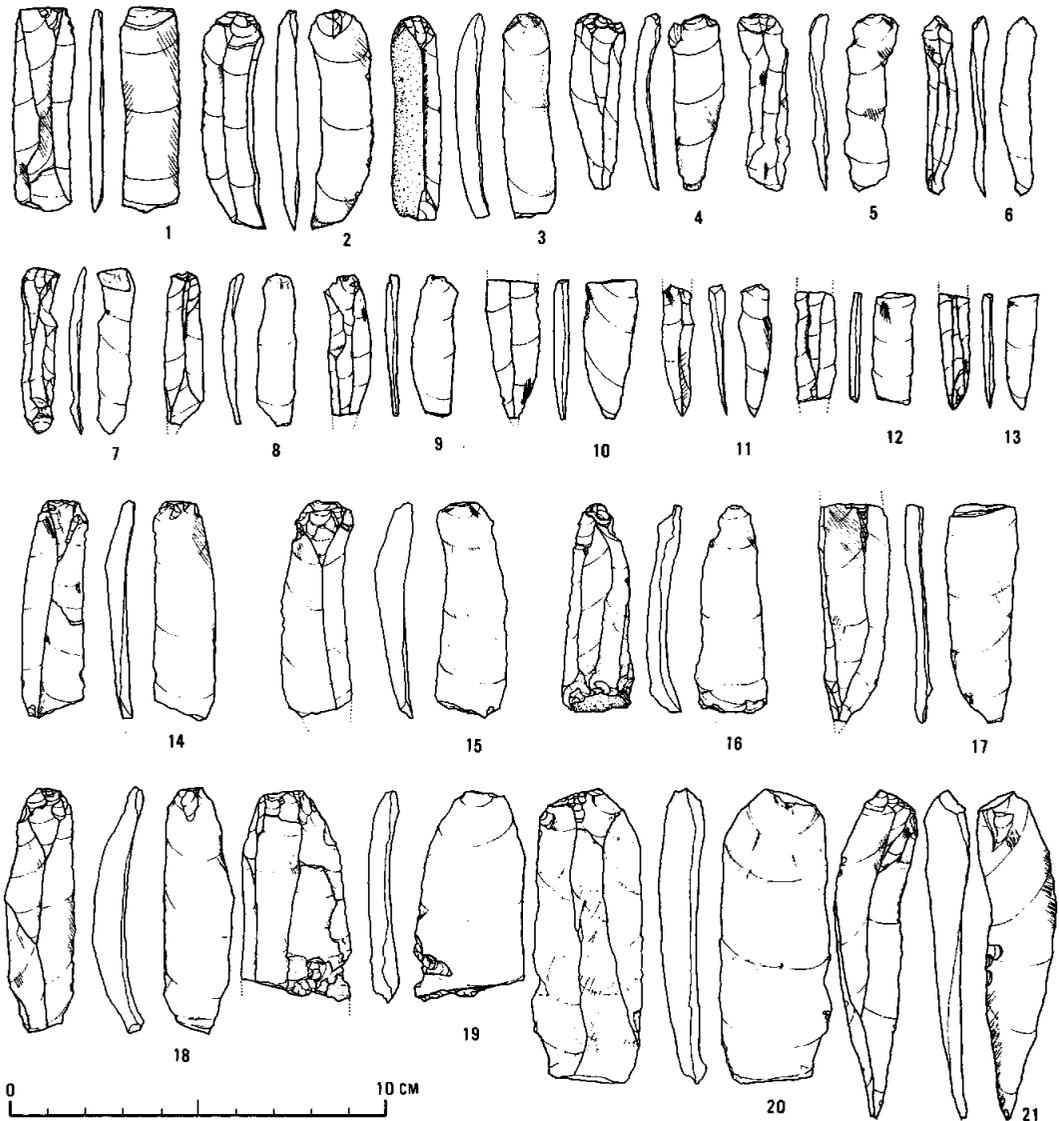


図3

(→写真2)

のことがある。これらはいずれも図3に示した資料と同じく、調整打を加えないまま使用し、これを繰り返すうち再加工が必要になったものと思われる。また、刃部に再加工をしているものは、当然ながら未加工のものよりも主剥離面に対する角度が大きくなるため、機能も異なったものに移行したと考えられる。図4-14・17、図5-1・4・7がその顕著な例であるが、刃部を平行して移動する機能(ナイフ)から直交して移動する機能(スクレイパー)へと変わっていると考えてよさそうで

ある。図5-9は先端部に著しい磨滅が認められる唯一の例である。彫器とするには意図的な刃部加工を認めることはできないが、それに近い使用がなされたものであろう。

つまみのあるナイフ (図6-1~14) 6-12、14は黒曜石製であるが、他はすべて頁岩製である。いずれも縦長の剥片を用い、上端に左右の挟入がある。挟入部は背腹両面からの調整もあるが、多くは主剥離面からのものである。また、14だけは背面全体に整形打が加えられているが、他はいず

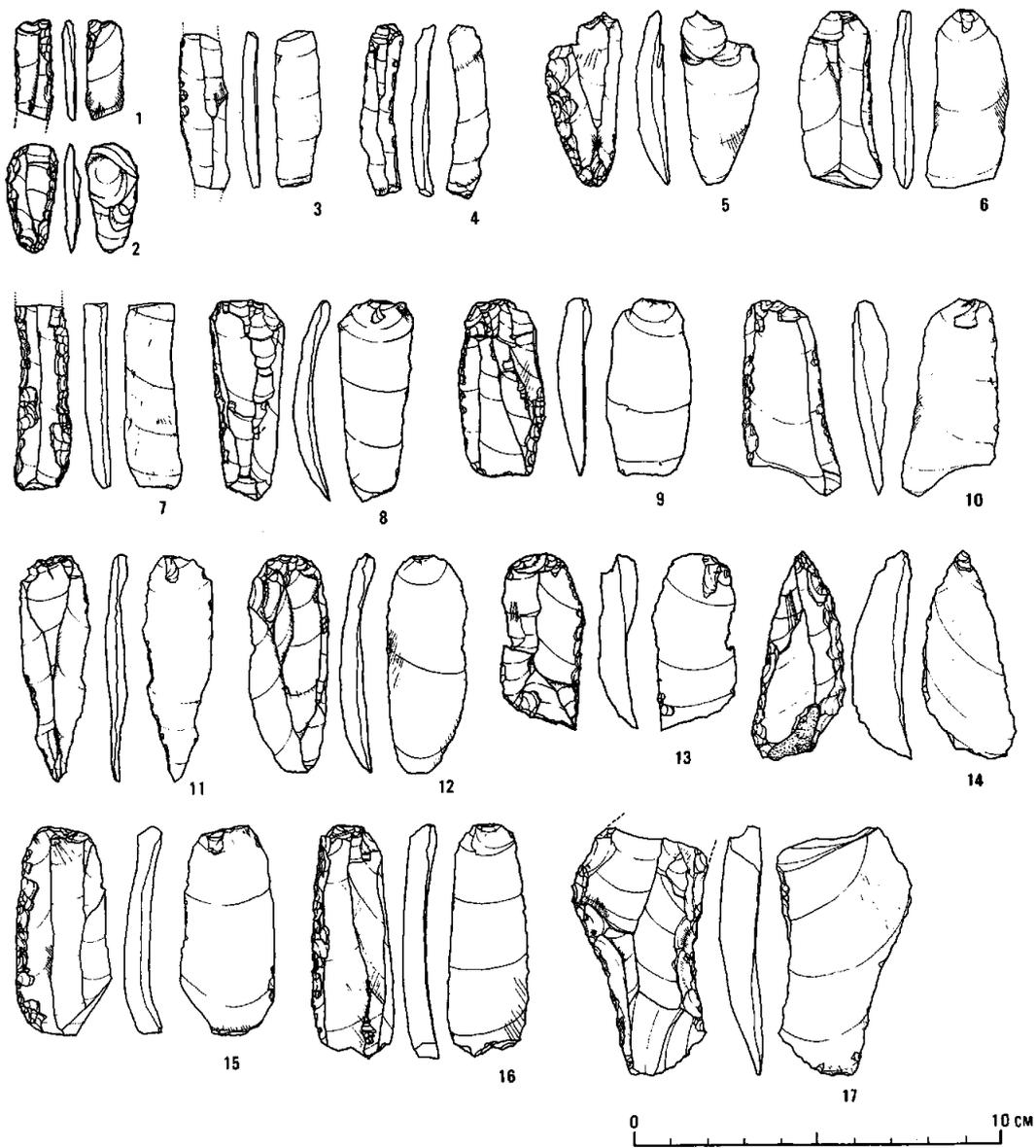


図 4

(→写真3)

れも背面に稜を残している。1～14のうち刃部に使用痕のみがあるもの6点、調整打を加えているもの7点があり、未加工のものが約半数を占めているのは、このタイプのものが当初から刃部に調整打を施しているものではなかったと考えてよいだろう。また、14は明瞭ではないが、他はいずれも刃部に磨滅のあとが認められる。

石錐(図6-15~31) いずれも頁岩製である。15~17の上端には抉入部がある。また、15、16に

は平行する両側縁に整形打が加えられている。22は上下両端に刃部がつくられる数少ない例である。図示しなかったものを含めても3~4個程度である。全体的にみると必ずしも定形化されているとはいえず、刃部の加工も主剥離面から背面にだけ施されるもの、両面からなされるものの二通りあるが、いずれも刃部は明瞭につくり出されている。石核(図7-1~6) 採集された石核の総点数は44点あり、そのうち37点が頁岩製である。残り

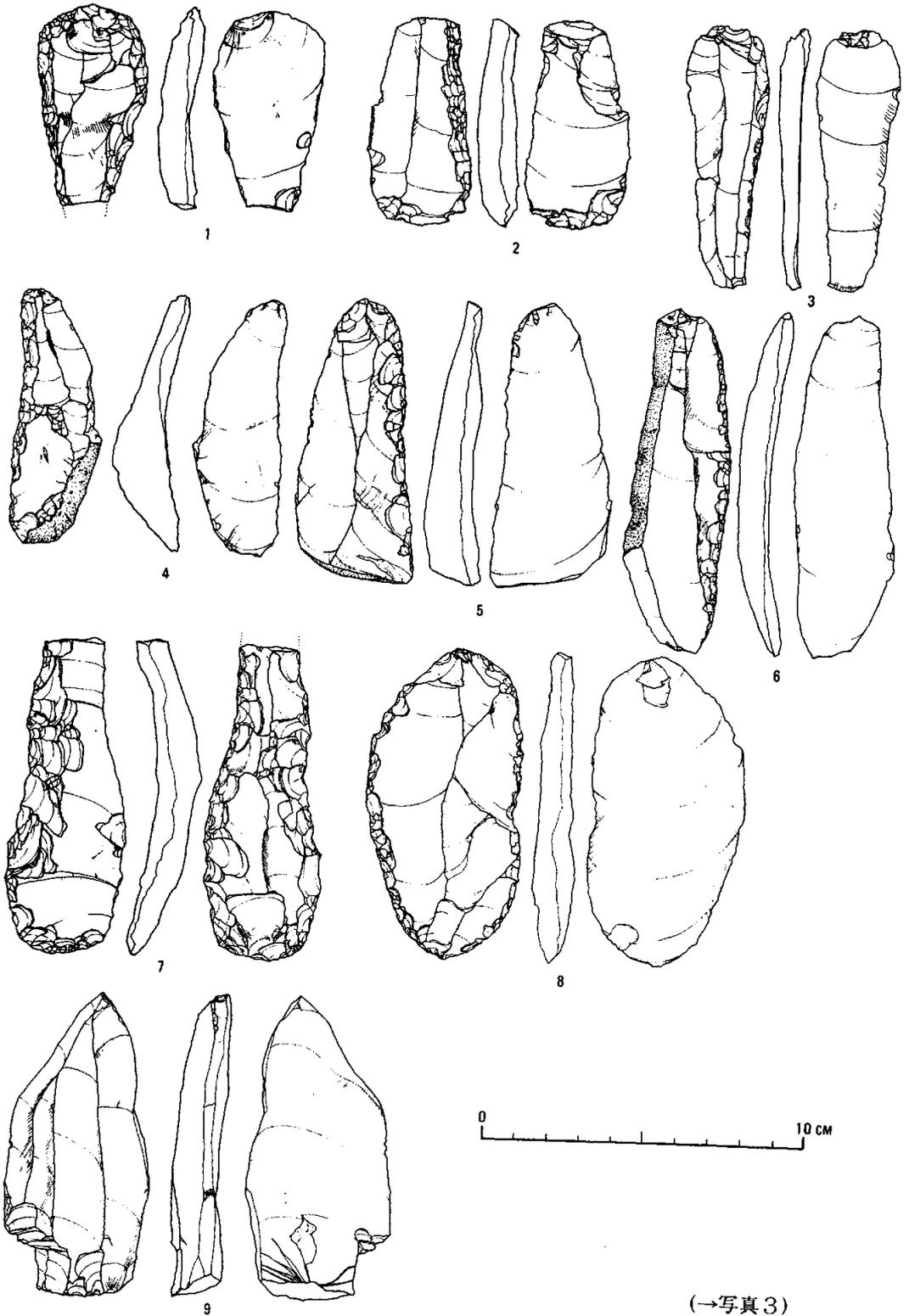


図 5

(→写真3)

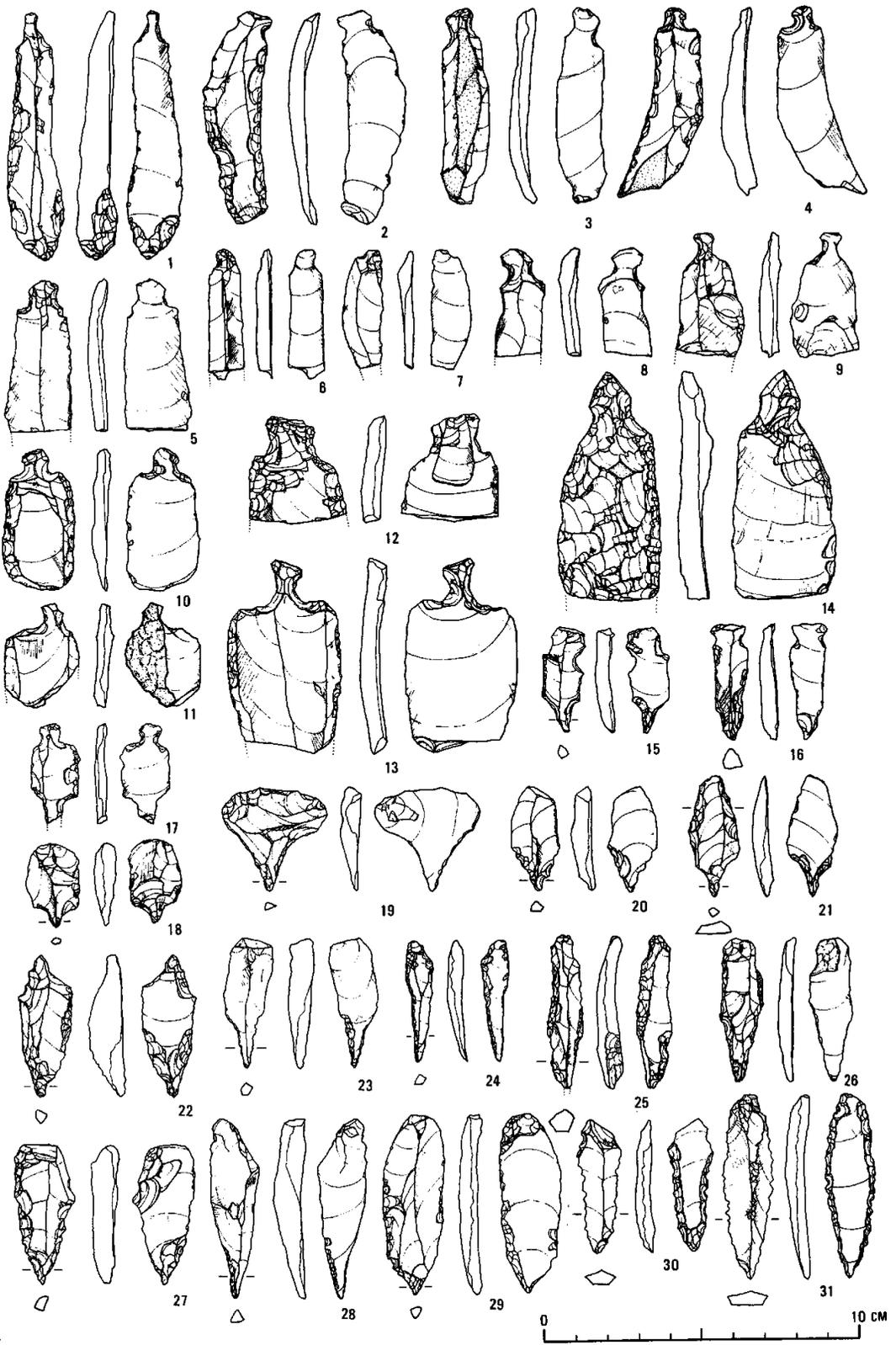


图 6

はメノウ・ジャスパーであるが、メノウ製の石器は石錐の4点しかなく、他はいずれもフリイクであるため、当初から石器製作を意図して使用していたかどうかは疑わしい。このような傾向は他の時期の遺跡でも散見されるため、あるいは練習用として用いられていたものかもしれない。

図示した資料の1・5・6は全周から剥離されているが、全体数からみるとむしろ2～4のように自然面を残すものが多い。また、剥離の方向はほぼ一定しており、2のように上下に打面をもつものや、6のように横から整形打の加えられるのは少数である。

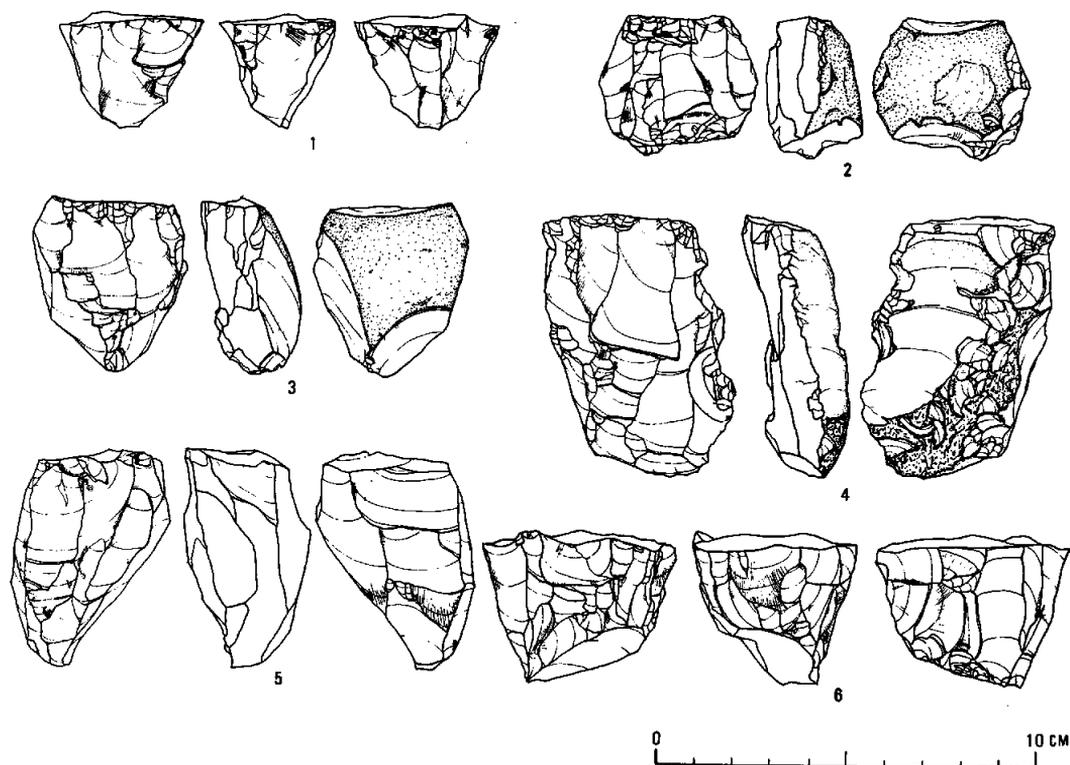


図7

(→写真4)

すり石類 (図8-1~6) ここには砥石・すり石・敲石を含んでいる。1は扁平な砂岩製のすり石である。図示した面はなめらかに磨かれており、裏面の凸部と下縁にもあるため、石鋸としての機能を有していたと考えられる。2はかすかにベニガラの付着する砂岩製のすり石である。一見砥石のようであるが、尾河台地遺跡の調査結果では、ベニガラ生産に関係する石器の一つであることが推定されている(金盛他1983)。3は長円形の流紋岩による砥石である。砥ぎ面は滑らかであるが、左上方に無数の条痕がある。採集点数は1点だけである。4・6は安山岩の礫であるが、表面全体は丁寧に磨かれており、断面は扁平である。5は

上下端および背腹両面に敲打痕がある。しかも熱を受けたらしくひび割れが認められる。

石鏃 (図9-1~29) 石鏃は破片も含めて42点採集されているが、頁岩製の2点を除いて他はすべて黒曜石製である。

図示した石鏃は定形もしくはそれに近いものであるが、形態上、無茎鏃と有茎鏃の2群に分類することができる。しかし、それぞれの群のなかにあってもさらにいくつかの類型に細分され、また、その違いは時間差をも意味するようである。

1~10は縄文早期に特徴的な長身の鏃である。1の基部両側縁はすぼまっており、基部に至ってやや広がる。基底もやや内側に湾曲する。裏面に

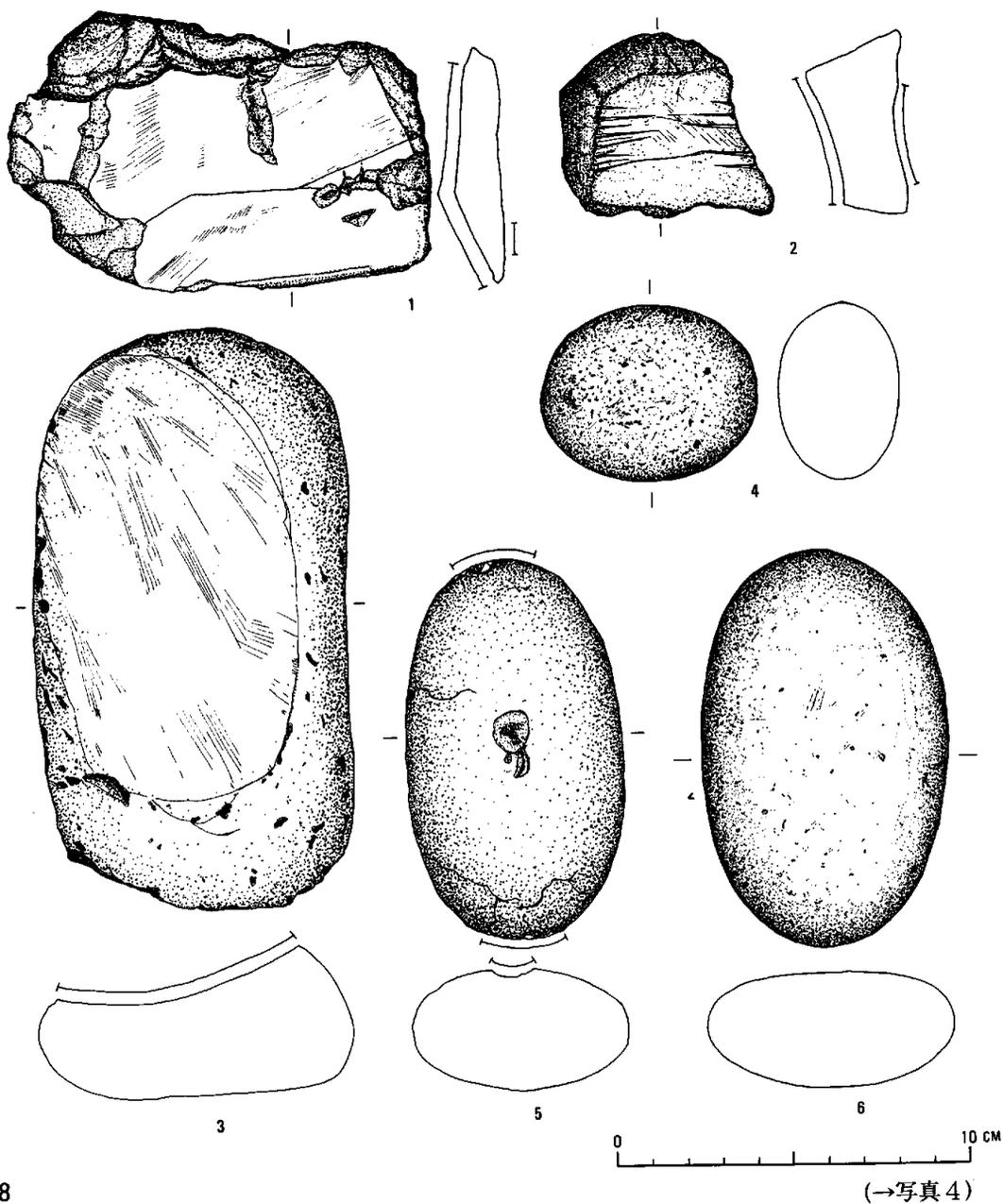


図8

は横方向からの比較的大きな剝離面が残されているが、この面は整形打によるものではなく、本体を石核から剝離した時の面であろうと考えられる。つまり、この資料に関していえば、縦割ぎによる剥片を利用したものではなく、別な方法によって得られた剥片から成るものといつてよいかもしれない。

2～6は一部を欠損するものもあるが、両側縁の平行部分を多くとるグループである。全体的に丁寧な整形打が加えられ、特に3には槌状剝離がみられるが、5は中心線上に原剝離面を残している。この場合も鎌身に対して横方向から打撃があったことを示しており、1と同様の例である。8～10は胴部にややふくらみを見せるグループであ

るが、8・9と比較して10は幅広くつくられている。7・11~18は三角鏃である。このうち7・11~13は縄文早期のものと考えられるのに対し、14~18のなかには続縄文期のものが含まれている可能性もある。しかし、製作技法上類別することは困難である。19~28は有茎鏃である。19~25は鏃身部と茎が明瞭につくり出されているが、26~28は菱形を呈し、それぞれのグループの中でも形態

は一様ではない。29は頁岩製の例であるが、茎部を欠いているため有茎・無茎のいずれに属するか不明である。なお、19は片面に原剥離面を大きく残しているため未成品と考えられる。また、22の先端部には著しい磨滅があり、肩部をつくるように再調整打が加えられている。形態上は鏃であるが別な用途に用いられたものと考えられる。

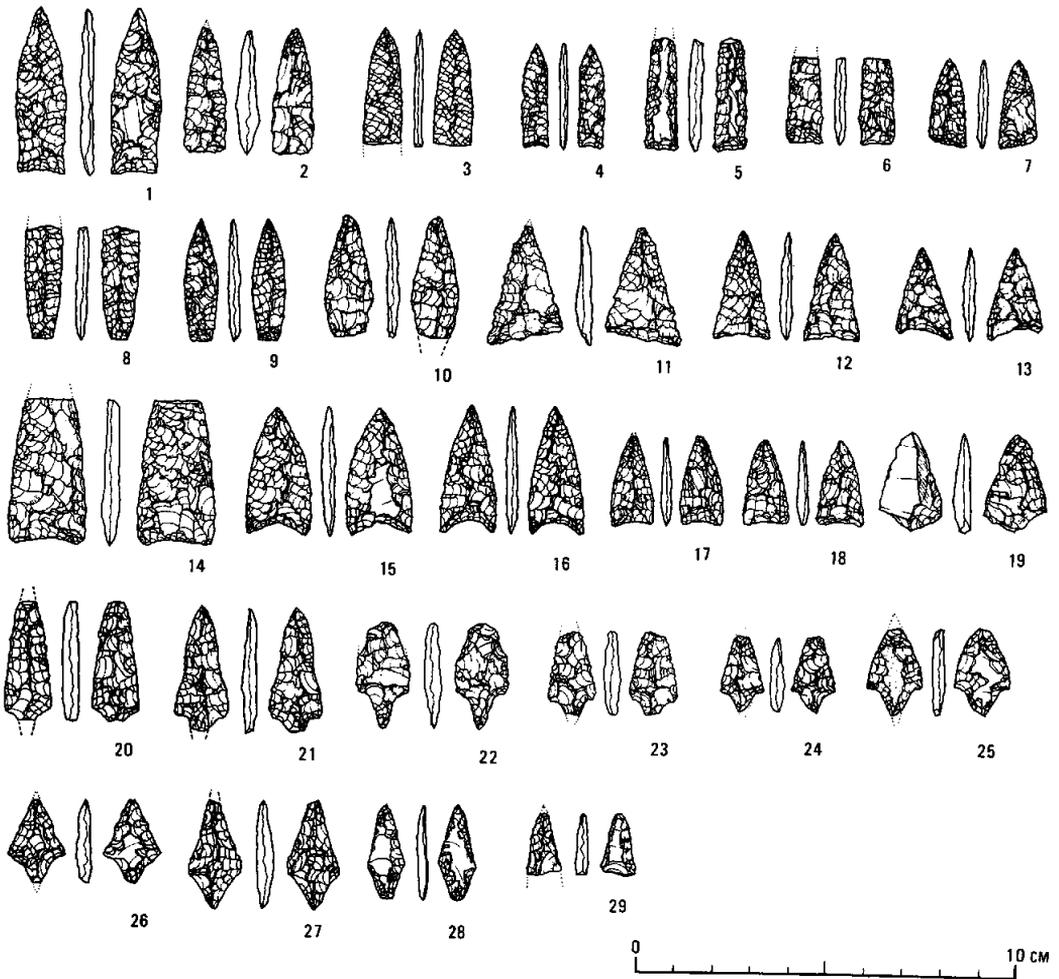
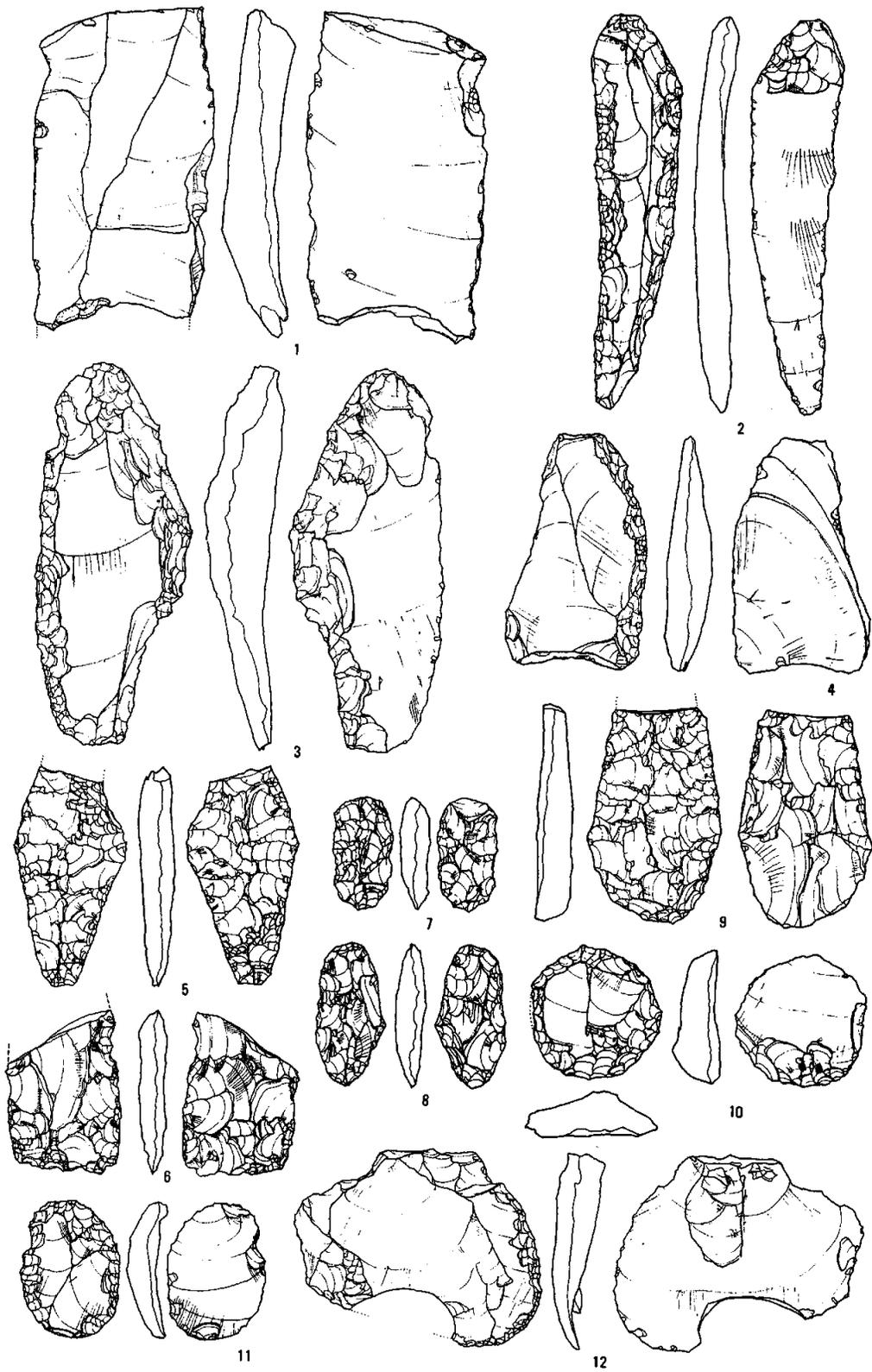


図9

(→写真5)

石刃 (図10-1) 上下を欠いているが大型の石刃である。左右両側縁には使用によると思われるこまかな刃つぶれが認められる。製作技法上、明らかに先土器時代に属するものと判断されるが、他の頁岩製の石器との共伴関係も否定しがたい。
 搔器 (図10-2~4, 9~12) このうち2・3・

9は石刃と同時期のものと考えられる。2は石刃の両側縁に調整打を加えて刃部をつくり出しており、バルブ付近の主剥離面に一部整形打がみられる。3は右側縁に一部自然面を残す縦剥ぎによる石器である。刃部は左側につくられ、自然面の残された側には整形打が加えられている程度である。



0 10 CM

图10

(→写真5)

4も同じく片側縁にのみ刃部がつくられているが、主剥離面と背面との剥離方向が異なっているため、石核を調整した際の剥片を利用したものかもしれない。9は両面加工のエンドスクレイパーである。刃部は再調整打が加えられ、主剥離面との角度は直角に近い。10・11は全周に調整打が加えられ、10の下縁には主剥離面にも調整打がみられる。11は10よりもやや細長く、左下と右上方に使用頻度が集中している。12は大形で打面、バルブとも残されている。刃部を一部欠いている。

ナイフ (図10-5~8) いずれも両面加工である。5は先端を欠いているが槍型をしていたものと思われる。石槍の可能性も否定できないが、右上部側縁に抉入部があり、おそらくナイフとして片側の使用頻度の高さからくる再調整によるものと判断してこのグループに入れた。6も上半部を欠損しており、全体の形は不明であるが、刃部稜線に磨滅が見られるためナイフとした。7・8は大ききの割には厚手につくられている。刃部は刃つぶれしており、全面に被膜で覆われたような光沢を見せている。

石斧 (図11-1~3) 未成品を含めて4点採集されているが、いずれも緑色片岩製である。1は磨切技法による小形石斧の刃部破片である。刃部には直交する条痕が多数見られ、特に刃部の角度の小さい面に多く残されている。2の使用度はあまり高くなかったらしく、器体には整形のための擦痕が残されているが、上部と刃部に若干の磨耗が認められる。また、1と同じく刃部断面の角度の小さい面に刃と直交する条痕がある。3は上端に敲打痕があるが、使用の結果ではなく、整形面が残ったものと考えられる。上端を除く器体の全面は丁寧に研磨されており、残された擦痕によって研磨方向を知ることができる。刃部には1・2と同じく小角度の面に使用による磨耗と条痕が見られる。

以上の石器のほかに写真6~11に示した石器があるが、やはり採集資料全体の中の一部でしかない。これらの資料は特に説明を加えないが、写真6~8は頁岩製の縦長剥片および石器である。写真9は同じく頁岩製によるものであるが、縦長の剥片石器、不定形石器、つまみつきナイフ、石錐などを示した。写真10は石核とすり石類である。写真11は頁岩製石鎌と石斧未成品(?)の各一点を

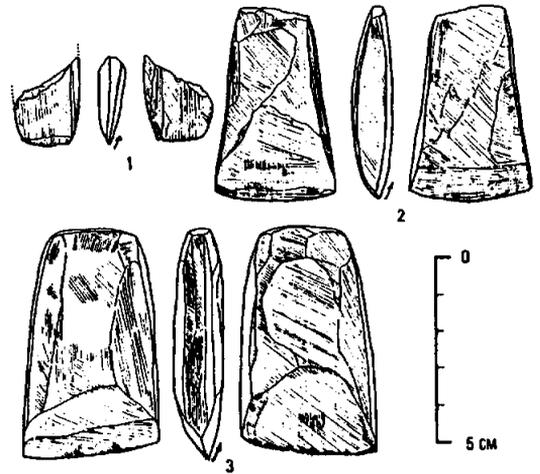


図11

(→写真5)

除いて全て黒曜石製の石器および破片である。

考 察

先に述べたように本遺跡からは縄文早期と続縄文期の土器が出土している。前者をI群、後者をII群としたが、I群は無文の平底土器であり、器面の整形痕、胎土に含まれる繊維等から、十勝地方のいわゆる暁式に類するものと考えた。また、実見していないが釧路地方でいうテンネル式に相当するものであろうとのことである。³¹ 斜里町内では貝殻文土器は4遺跡ほど確認されているが、この種のものには他に例がない。網走管内でも出土例は無いようである。したがって、今後の発見例を待つべきであるが、現時点で判断するにすぎず、釧路・十勝地方にその系譜を求めべきであると思う。

II群とした土器は後北Cに相当する土器である。出土点数は非常に少なく、1~2個体程度のものであると思われるが、これは採集の粗密からくるものではなく、当初から少なかったものと判断される。

斜里町における続縄文期の遺跡では宇津内II群の時期に多数の竪穴住居が営まれ、遺物量も豊富であるが、後半になると竪穴はおろか遺物そのものが極端に減少する傾向にある。このことは全道的な視野に立って判断しなければならないことであるが、おそらく居住する人口自体が移動もしくは自然減少していった結果であろうと考えられる。

石器素材の中で頁岩が圧倒的に多いことはすでに述べたが、採集された全ての資料の石質による量的比較を示したのが表1である。

これによると、総重量の66.5%、点数で80.32%を頁岩が占めている。重量比でこれに次ぐのは安山岩であるが、点数では0.86%と黒曜石、メノウよりも下まわる。黒曜石は重量比で第4位にあるものの、点数比で頁岩に次ぐ多さを示している。この違いは礫器を主体とするものと剥片石器を主体とするものとの1点あたりの平均重量の差によるものである。

また、頁岩と黒曜石だけをとりあげて比較した場合、点数比では表1の数字とほとんど差は見られないが、重量比では頁岩が93.06%であるのに対し、黒曜石はわずか6.94%にしかない。これによっても両者の間に格段の差があることがわかる。このような比率を示す遺跡の例は、現在のところ道東部には存在しない。⁴⁾ それでは、このような差は一体何に起因するのであろうか。

頁岩と黒曜石との産地に至る距離差は当然考えなければならないとしても、それ以上の理由があると思えてならない。おそらく、無文平底の土器を持つ集団は、斜里町に渡来した時点で黒曜石原産地からのあらたな直接的、間接的入手ルートを知らなかったのではないだろうか。

つまり、鈴木遺跡で使用された黒曜石製石器は、すでに形として成っていたもの、あるいはその破片の再利用によるものであって、石核として残されるべき原石は当初から、あるいはこの遺跡の存

続期間中は得られなかった結果であると考えてるのである。

頁岩製石器を見るかぎり、彼等は明らかに縦長の剥片をとる技術を有していたことがわかる。しかし、図9-1・5に示した石鏃は横長の剥片を利用しているのである。また、図10-1・2・3・9は年代的にみても、製作過程から得られるはずの剥片の質量から判断しても、とうてい鈴木遺跡で製作していたとは考えられないのである。もちろん石器として使用されたのであろうが、これらの破損品から石鏃等の小型石器をつくるために、原材料としていずれかの地域からもたらされ、しかも、継続的な補給は絶えていたと考えられるのである。

次に石器の形態から他地域の石器群と比較してみると、最も近いのは帯広市八千代C遺跡(明石他1977)、同晩遺跡(佐藤他1985)の資料である。特に八千代C遺跡第1号竪穴住居跡床面出土の石器中、石鏃および縦長の剥片石器は著しい類似性を示している。材質が全て黒曜石であることと、つまみつきのナイフ、ドリル、すり石類等欠落している器種もあるが、伴出する土器の類似性もあわせると、両遺跡は時間的に極めて近い関係にあるといえそうである。

また、晩遺跡第4地点出土の縄文I a期(いわゆる曉式)とされる石器群の中でもやはり石鏃と縦長の剥片石器が強い類似性を示している。さらに、同地点では先土器時代のもも多く含まれているが、報告者の一人である北沢は「縄文I a期

表1 石質別石器対比表

	点	g	点%	g%	g/点
頁岩	2,796	19,110.2	80.32	66.50	6.83
黒曜石	550	1,425.0	15.80	4.96	2.59
メノウ	87	2,050.0	2.50	7.13	23.56
砂岩	12	670.0	0.34	2.33	55.83
安山岩	30	4,350.0	0.86	15.14	145.00
流紋岩	2	1,050.0	0.06	3.65	525.00
緑色片岩	4	81.6	0.15	0.28	20.40
計	3,481	28,736.8			

表2 年代別土器対比表

	点	g	点%	g%	g/点
縄文早期	553	2,630	97.98	89.00	4.93
続縄文	11	325	2.02	10.99	29.55
計	544	2,955			

になって出現した器種として石鏃、石錐、石斧などがあり、石刃もしくは石刃状剥片などを素材とした器種は前時期から引き継がれた」可能性があると述べている。鈴木遺跡における石刃の位置もあるいは同様の意味を持つものかもしれない。

このほか、長身鏃の形態だけに限定して比較すると紋別市柳沢遺跡（松下他1975）のほか、同オンネナイ遺跡（佐藤和利他1977）、羅臼町中台遺跡（沢四郎他1971）、標茶町飯島遺跡（宇田川洋他1976）、同金子遺跡（宇田川洋他1976）等でも見ることができる。これらの遺跡はいずれも縄文早期に位置するようであるが、伴出する土器は必ずしも一様ではない。また、頁岩製の縦長剥片による石器は縄文中期にまで存続し、後期に至ってようやく姿を消すのであるが、この傾向は北海道においてのみ見られる現象であり、石刃技法との関連で非常に興味深いものがある。今後、さらに検討する必要があると思われる。

いずれにしても、鈴木遺跡の石器群は縄文早期の無文平底土器に伴うものであろうし、先土器時代の石器製作技法の一部を引きつぎ、さらに石斧、石錐、つまみつきナイフ等を新たに付加したグループであるといえそうである。

おわりに

今回、鈴木遺跡の資料を紹介するにあたっては土器・石器を中心にとりあげたが、他の同時代の遺跡との関連については十分分析するまでに至らなかった。また、シュマトカリベツ、ボンシュマトカリベツ両河川域に集中する遺跡群との対比も触れていない。今後、遂時紹介する中でこれらの問題をとりあげていきたいと考えている。

なお、末筆ながら永年にわたって採集を続け、多量の資料提供と発表のお許しをいただいた鈴木勲氏には心から感謝を申しあげるとともに、本稿をまとめるにあたって、大井晴男、大沼忠春、沢四郎、豊原照司、畑 宏明の各氏から多くの御教示をいただいた。厚く御礼を申しあげる次第である。

註

- 1) 国土地理院 2万5000分の1地形図では「マクシベツ」となっているが、明治30年の陸地測量部による50000分の1地形図には「ボンシュマトカラベツ」とあり、地元の人もそう呼んでいる。また、マクシベツは西方

にあるウナベツの一部もしくは支流と思われるが、現在のところ明らかにはされていない。

- 2) 図示していないが、シュマトカリベツとの合流点から鈴木遺跡に至る約2.5kmの間に、縄文早期から晩期まで18ヶ所の遺跡があり、斜里町内でも最も分布密度の高い地域の一つである。
- 3) 大沼忠春氏の御教示による。
- 4) 常呂町岐阜第二遺跡K17ポイント周辺から頁岩のみによる石器が集中して出土しているが、報告者によれば先土器時代に属するものであるという。したがって当遺跡の石器群とは時間的に差をもつものと考えられる。藤本 強、宇田川洋、1977：岐阜第二遺跡、38-50P、常呂町。
- 5) 晩遺跡出土の石器群に注目した畑氏もまた、いくつかの遺跡との比較検討の中から、細石刃石器群と「年代的にもそれほどかけはなれたものではない」という考えを示している。畑 宏明 1984：晩式土器に共存する石器群について、河野広道博士没後20周年記念論文集、347-357。

文 献

- 杉本良也・三谷勝利・松下勝秀・高橋俊正 1962：峠浜、5万分の1地質図幅説明書、48P P、北海道開発庁。
- 金盛典夫・村田良介・田崎美砂子 1983：尾河台地遺跡発掘調査報告書、斜里町文化財調査報告II、248 P P、斜里町教育委員会。
- 明石 博・木村方一 1977：八千代C遺跡、65 P P、帯広市教育委員会・十勝郷土研究会。
- 佐藤訓敏・北沢 実他、1985：帯広・晩遺跡、帯広市埋蔵文化財調査報告第1冊、206pp帯広市教育委員会。
- 松下亘・三橋公平・小柳正夫・因幡勝雄 1975：柳沢第19地点、30 P P、紋別市教育委員会。
- 佐藤和利・小柳正夫 1977：紋別市オンネナイ第2地点遺跡、紋別市教育委員会。
- 佐藤和利・小柳正夫 95 P P 1982：柳沢遺跡(2)、紋別市教育委員会。
- 沢 四郎・大沼忠春・西 幸隆 1971：中谷遺跡、羅臼・羅臼町文化財報告1、25-44、羅臼町教育委員会。
- 宇田川洋・本田克代・豊原照司・松尾吉高 1976：釧路川中流域の縄文早期遺跡—飯島遺跡—63 P P、標茶町教育委員会。
- 宇田川洋・本田克代・豊原照司・松尾吉高 1976：釧路川中流域の縄文早期遺跡—金子遺跡—92 P P、標茶町教育委員会。

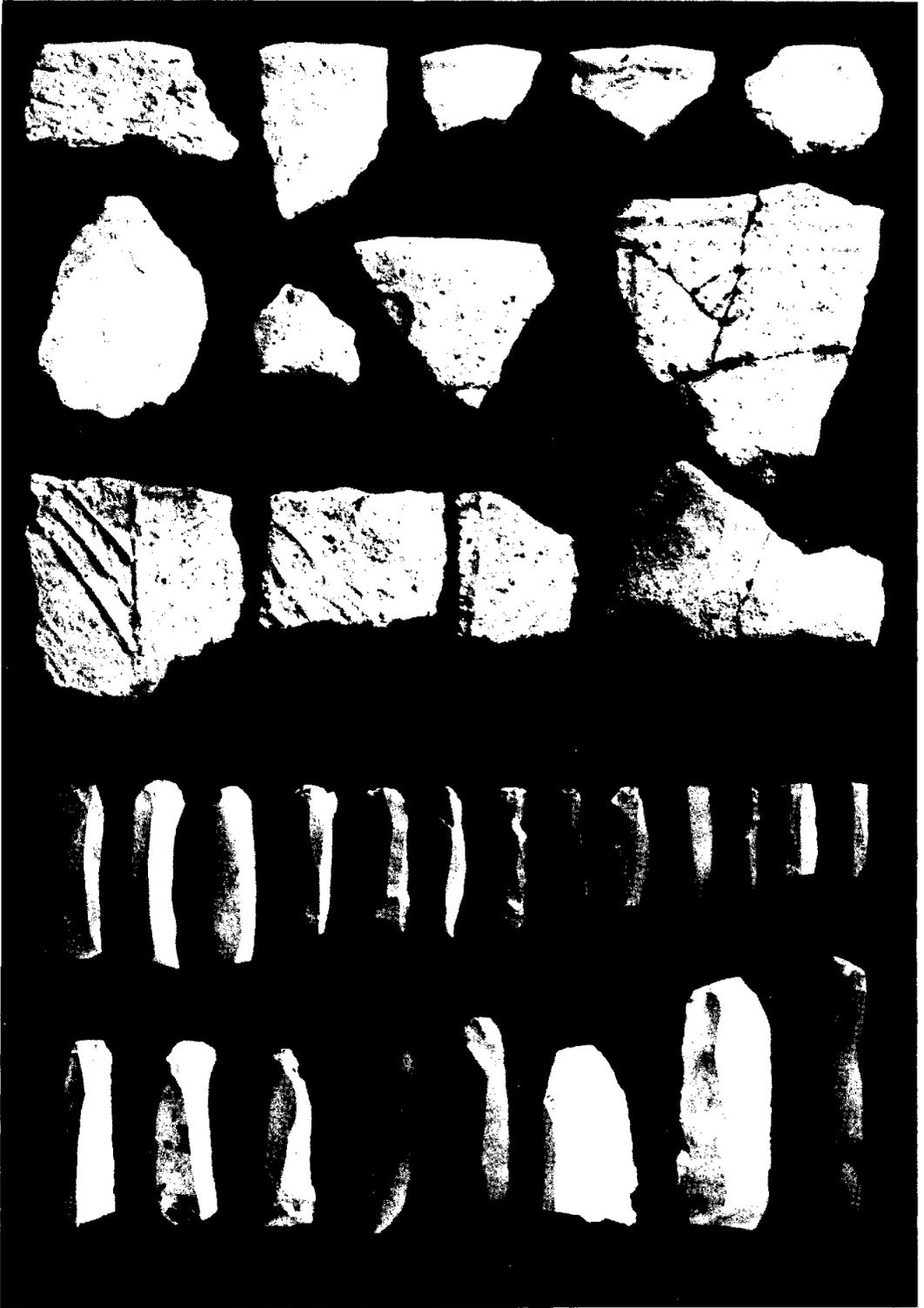


写真2 I・II群土器・剥片石器

1:2



写真3 剥片石器・つまみつきナイフ・石錐

1 : 2

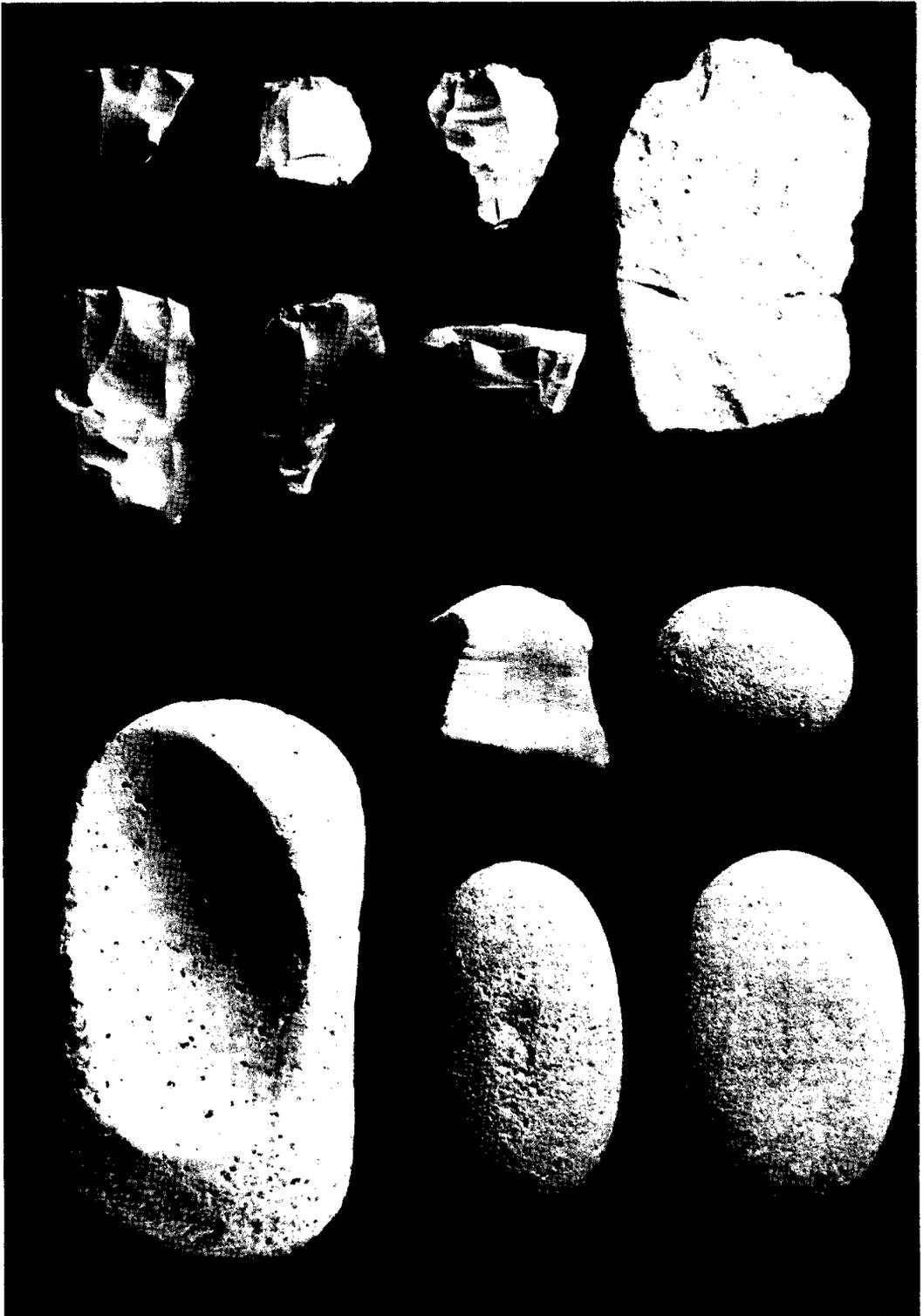


写真4 石核・すり石・砥石・敲石

1 : 2



写真5 石鏃(上段)・石刃・搔器・ナイフ・石斧

1:2



写真6 剥片石器

1:2



写真7 剥片石器

1 : 2



写真8 剥片石器

1 : 2



写真9 剥片石器・つまみつきナイフ・石錐

1:2

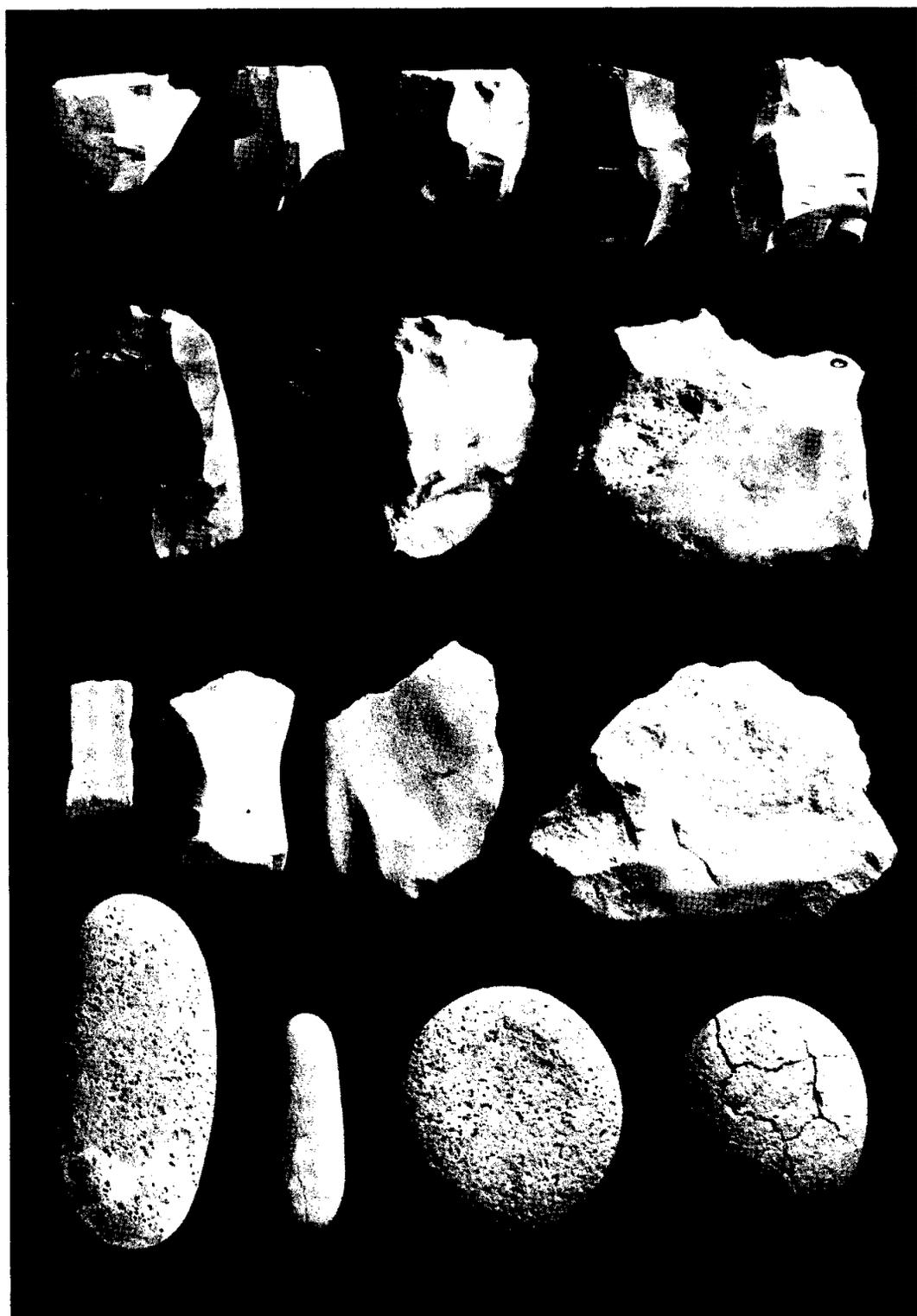


写真10 石核・すり石・敲石

1 : 2



写真11 黒曜石製石器(石鏃-真石、石斧未成品-綠色片岩 各1舎)

1 : 2

正 誤 表

	誤	正
ノページ		
本文左段下から4行目	自然公布	自然分布
ノページ 発行年	1982	1985
20 " "	"	"
36 " "	"	"
38 " "	"	"
40 " "	"	"
42 " "	"	"
48 " "	"	"
50 " "	"	"
52 " "	"	"
54 " "	"	"
55 " "	"	"
56 " "	"	"
58 " "	"	"
60 " "	"	"
62 " "	"	"
64 " "	"	"
66 " "	"	"
68 " "	"	"
70 " "	"	"
70 " 写真 / /	(石鏡一頁石、	(石鏡一頁岩、